

# 大磯の一茶と呼ばれた文筆家 上

―町民は宰相も、その天敵も敬愛した―

ノンフィクション作家 三山 喬

東京からJR東海道本線下り列車に乗り、車窓にちらちらと海が見え始めるのは、平塚駅を過ぎた辺りからだ。次の停車駅・大磯で海側にある唯一の改札口を出ると、目の前に「湘南発祥の地大磯 著書湘南清絶地 崇雪」と大書された高さ三メートルほどの石碑が現れる。そもそも地理的にどこからどこまでが「景勝地・湘南」に当たるのか、その範囲は神奈川県内でも曖昧で、大磯町観光協会は七年前、江戸初期の標石にある文言を根拠として「我が町こそがその当該地だ」とアピールする新たな石碑を建てたのだ。

昼食をとれる飲食店が見当たらず、駅前から十分も歩くうち海岸線に出てしまった。のどの渴きを癒そうと飲料の自販機を探してもなかなか見つからない。駅

周辺からして商業的要素がほとんどない住宅地。その閑静な町並みには、観光客向けの店が建ち並ぶ江の島や鎌倉とはまた違った「保養地としての湘南イメー」が確かに感じられる。

## 一躍注目を浴びた時事エッセイ

駅の背後（北側）には線路近くにまで急傾斜が迫っている。緑に覆われたその中腹には、モダンな欧風住宅があちこちに建つ。その昔、三菱財閥を創設した岩崎家の私有地だったというこの坂田山が、今回の目的地だ。大磯の町並みと相模湾を一望する高台にあるという「高田公園」を私は目指していた。

残暑の日差しが容赦なく照りつける。つづら折りの細道を汗だくで登攀し、住宅の隙間を縫う短い階段を登り切った先に、その場所は見つかった。ヒグラシの蟬時雨に包まれた一帯に人影は一切ない。ブランコなど申し訳程度の遊具やベンチ、公衆トイレなどが置かれるほか、テニスコートほどの広場があるのだが、近ごろは駆け回る子どももないのか、生い茂る夏草に一面覆われてしまっている。

この場所に名を遺す文筆家・高田保にまつわる一角は、小ぢんまり右手の奥に設けられていた。「高田保ここに眠る」。そう彫られた墓石は、着物を収納するつづら箱のような形状で、文字面は天上に向いている。傍らの壁にはめ込まれた石板には「海のいろは日ざしで変る」という高田の言葉がある。

昭和二十七年（一九五二年）二月、この人物は五十六



高田保（1895～1952）「単独講和」「天皇制」「再軍備」などに反対する、軽妙かつ風刺とユーモアに富んだ文章は好評を博した。写真はウィキペディア掲載のもの

歳の若さにして大磯で病没した。茨城県・土浦町（現・土浦市）出身で、脚本家や随筆家として東京で活躍した。温暖な大磯に移り住んだのは昭和十八年、四十八歳のとき。持病の結核が悪化したことだった。

つまり高田が大磯の町民だったのは、戦中から戦後のわずかな時期。それでも彼の筆名が幅広く世に知られたのは、まさにこの最晩年のことだった。

高田は戦後、昭和二十三年から死の間際まで『東京日日新聞』という『毎日新聞』系列の夕刊紙（創刊は同年。昭和三十年に『スポーツニッポン』に統合され休刊）で「ブラリひょうたん」という一面の時事エッセイを執筆した。世相や政治を巧みに論評する筆さばきの軽妙さが、このエッセイで一躍注目されたのだ。

古い友人の評論家・大宅壮一は、人柄にマッチした独特の文章の書き手として「銀座裏の良寛、大磯の一茶」と高田を表現した。

大磯には住まいがあるだけで、論評するテーマも文章の発表媒体も「中央」が舞台。大磯での居住も晩年の九年間に限られた。にもかかわらず地元の人々は高田を「郷土の文化人」と敬愛し、その死後には町立の記念公園まで造ったのだ。